

亜鉛栄養治療 第5巻 第1号

目 次

ご挨拶	宮田 學	2
(総説) 亜鉛と肝疾患	森山光彦	4
(研究) 肝移植における周術期栄養療法の有用性	海道利実	12
(研究) 神経疾患と亜鉛	川原正博	25
(研究) 海馬における亜鉛シグナリング	武田厚司	37

近畿亜鉛栄養治療研究会からのお知らせ

第9回近畿亜鉛栄養治療研究会会場風景		A1
第9回近畿亜鉛栄養治療研究会総会報告		A3
第9回近畿亜鉛栄養治療研究会出席者		A4
会員通信 追悼 相次ぐ重鎮の死を悼む	荒川泰昭	A5
近畿亜鉛治療研究会に参加して	樋本尚志	A6
近畿亜鉛治療研究会に参加して	橋本彩子	A7
亜鉛と悪性腫瘍—私の父の癌について思うこと	小野静一	A9
第4回 Metallomics 研究フォーラム		A15
Zinc Signals 広告		A16
日本解剖学会・全国学術集会ご案内		A16
「亜鉛文庫」登録主要図書		A17
第10回近畿亜鉛栄養治療研究会のご案内		A19
平成26年度会費納入のお願い		A21
入会申込書		A22
近畿亜鉛栄養治療研究会定款, 同付則		A23
役員名簿		A25
会員名簿		A27
府県支部支部長・副支部長名簿		A30
投稿規定		A31
編集後記		A32

ご挨拶

「亜鉛栄養治療」第5巻第1号をお届けします。

日頃、近畿亜鉛栄養治療研究会にご支援、ご鞭撻いただき有難うございます。

多くの方々のお力添えをいただき、会員300名の会に発展して参りました。これも皆さまのご支援の賜物と感謝いたしております。

亜鉛は、9種類の必須微量元素のなかでも、鉄、銅とともに生命の維持、健康の増進において多彩な生理作用を有していますが、まだまだその重要性について広く認識されるに至っていません。その知名度は、鉄が総理大臣とすれば亜鉛はさしずめ1年生議員といったところでしょうか。

4年前研究会を設立した頃は、亜鉛だけの研究会では続けてやっていけないのではないかという意見や、年2回の開催は難しいのではないかという意見がありましたが、最近では毎回100名を超える参加者があり、質疑応答も活発で、最後までほとんど席を立つ人もいないことに内心驚いている次第です。

私は、日本大学の富田寛先生や大阪大学の岡田正先生が中心になって運営されていた微量金属代謝研究会に毎年演題を応募し発表させていただいていましたが、発表内容を論文として提出することを求められ、程なく送られてくる会誌「微量金属代謝」に掲載される論文は、私の1年間の研究のひと区切りでもありました。

「近畿亜鉛栄養治療研究会」設立にあたり、ご講演いただいた内容は論文の形でおまとめいただき機関誌にご投稿いただくことをお願い致して参りましたが、3年間にご投稿いただいた論文が25編になり、3周年記念事業として論文集（第1集）を出版することができました。

全国には孤軍奮闘、亜鉛の臨床研究を進めておられる先生が多くあります。一般演題としてどしどしご応募いただき研究論文としてご投稿いただけるようお願い致したいと思います。亜鉛治療はともすれば民間療法や代替医療のひとつであるかのように見なされ、正當に評価されていない部分があると思いますが、地道にエビデンスを積み上げ科学的な評価に耐える臨床研究を進めていく以外に道はないと思います。

近年の亜鉛トランスポーターや細胞内亜鉛シグナルを初めとする基礎医学、基礎生物学分野における亜鉛研究の進歩は目覚ましく、亜鉛をテーマにした国際学会が定期的に開催されるようになりました。今や、わが国の研究者がこれらの国際学会を引っ張っていく時代になってきました。

当研究会は、この基礎研究と臨床応用の架け橋となるべく、看護師、栄養士、薬剤師、臨床検査技師、その他、パラメディカルの方々や患者さんを含む一般会員のお力添えもお願いして発展していければいいなと願っています。

昨年は、2013年11月東京で開催された第10回国際微量元素学会（児玉浩子会長）において近畿亜鉛栄養治療研究会のメンバーを中心にシンポジウム「高齢者の亜鉛欠乏症（Zinc Deficiency in the Aged）」を組ませていただきました。

これからは脳内神経伝達とくに海馬における記憶保持に関する亜鉛の役割が国際的研究の中心的テーマになると考えられます。第9回の研究会において、長年にわたり一貫して神経伝達と亜鉛の研究に邁進

しておられる静岡県立大学の武田厚司先生と武蔵野大学の川原正博にご講演いただき、「亜鉛栄養治療」第5巻第1号にご投稿いただいた論文をお届けします。

亜鉛の栄養治療はただ単に補給すれば良いと言う時代から、どの臓器のどのトランスポーターの障害であるかを見きわめて治療する時代なると考えられます。

脳神経疾患における亜鉛治療はさらに複雑です。血液脳関門が正常に機能している時と破綻した時では全く亜鉛動態は異なってくると思われ、通常過剰症はほとんど見られない亜鉛もこと神経伝達に関しては微妙な濃度の違いが促進にも阻害にも働き得るという側面をもっていると思われ、

亜鉛栄養治療研究会は来年、2015年4月、設立5周年を迎えます。時あたかも我が研究会の顧問でもある元京都大学総長井村裕夫先生を会頭として、第29回医学会総会が開催されます。総会の期日に合わせて亜鉛の栄養治療に関する市民公開講座を企画しました。臨床医はじめ一般市民の方々にも亜鉛の重要性を知っていただく良い機会になるのではないかと思います。日頃研究会にご出席いただけない遠方の会員の先生方にも、是非ご出席いただきたいと思います。今後ともよろしくごお願い申し上げます。

平成26年10月吉日

近畿亜鉛栄養治療研究会

代表世話人 宮田 學